

## 【当院における免疫染色の現状と運用】

◎安武 謙<sup>1)</sup>、梅澤 由美恵<sup>1)</sup>、川崎 辰彦<sup>1)</sup>、田中 義成<sup>1)</sup>  
国家公務員共済組合連合会 佐世保共済病院<sup>1)</sup>

当院は306床の中規模病院であり、病理検査業務は常勤の病理医1名と臨床検査技師3人で行っている。2024年度の組織診検体の件数は2942件、免疫染色件数は3021件である。免疫染色装置はベンタナ ベンチマーク ULTRA、検出試薬はultra View DAB ユニバーサルキット（ロシュ・ダイアグノスティックス）を使用している。近年、コンパニオン診断の普及により免疫染色における精度管理の重要性が増している。しかし、安定した精度を維持するには、コストや業務量の増加が問題となるため、コスト管理や業務の効率化も重要となる。そこで今回は当院における1)免疫染色の精度管理、2)コスト管理、3)業務効率化の取り組みなどについて述べる。

1)当院での免疫染色の精度管理として日本病理精度保障機構による外部精度管理とコントロール切片を用いた染色性の確認を行う内部精度管理を実施している。コンパニオン診断においてメーカーが指定する抗体試薬や、プロトコールに従って染色する場合は染色性が担保されている。しかし、コンパニオン診断薬以外において一次抗体が使用機器のメーカーと異なる場合、反応強度が異なるため抗体試薬の調整を施行している。そのため染色性の精度の確認として外部精度管理、内部精度管理を行い、その精度の担保に努めている。2)コスト管理としてコンパニオン診断に関しては自施設と委託の費用を比較検討している。コンパニオン診断を自施設で行う場合、検査結果の早期報告、保険点数のすべてが収益になる利点がある。しかし、検査件数が少ない場合には抗体試薬が消費できずコストの損失につながる。一方で検査を委託する場合、初期費用は掛からないが、委託費用が掛かるため、保険点数の一部の収益のみとなる。これらの理由に加え、病理医の業務負担なども考慮し、コスト管理することは重要である。3)業務効率化の取り組みとして、最近では免疫染色の結果次第で遺伝子検査に進むことが増えているため、予め遺伝子検査などの可能性のある症例や少量の検体に関しては未染色標本を複数枚作製するなど検体の消失防止や報告時間の短縮を図るようにしている。当日は上記で挙げた精度管理やコスト管理、業務効率化の取り組みについて詳しく紹介する。

電話番号：0956-22-5136（内線：1155）